The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜書評＞森直久（著）『 想起 過去に接近する方法 』
Author(s)	宮前, 良平
Citation	災害と共生. 2023, 6(2), p. 1-5
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91043
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

森直久（著）『想起　過去に接近する方法』東京大学出版会，2022 年 7 月刊，254 頁

宮前良平[1]
Ryohei Miyamae

１．想起とはなにか

本稿で扱う『想起　過去に接近する方法』は、アメリカの心理学者J.J.ギブソンの生態心理学をもとに、想起の捉え方を一新する意欲作である(1)。本書で示される想起観は一見すると難解で、形而上学的な雰囲気さえある。しかし、一度この考え方に親しむともはや元の想起観に戻ることは極めて困難である。まずは本文中から想起の定義に当たる箇所をいくつか引用しよう。

「想起」とは、過去を環境に探索しようとする「行為」であり、その結果もたらされる過去事象の「知覚」である（p.5）

[想起とは、]かつて身を置いた環境と接触した（行為した）身体が、今ここで想起している身体と同じ身体であることが発見されていく活動（p.15）

想起において、自己（とその相補的存在である環境）は二重化する。「今―ここの自己（身体／環境）」の内部に入れ子となった形で、「現在の自己」と「過去の自己」が分化する。入れ子になった二重化された環境で、「今―ここの環境」に適応的な形で、「現在の自己」と「過去の自己」それぞれが有する予見性の差異を探査し、発見、特定することが想起である（p.225）

ここでポイントとなるのは、想起は「行為」そして「知覚」であるという点、「現在の自己」と「過去の自己」が二重化した際に想起はなされるという点である。特に「自己の二重化」を正確に理解することが本書の肝となる。まずは評者の個人的な経験をもとに説明に先鞭をつけたい。

私には高校を卒業し実家を離れるまで同居していた祖母がいた。帰省するたびに老いていく祖母を目にして、私は目の前に祖母がいるにもかかわらず、かつての祖母の姿を思い出すことができなくなっていた。目の前にいる、車いすに乗り痩せた祖母の姿から、自転車に乗り畑作業に精を出し、おやつにとおやきを作ってくれた過去の祖母の姿を想起することがどうにもできなかった。先日祖母が亡くなり、ふと思い出した祖母の姿は、亡くなる直前の祖母ではなく、不思議なことにかつての元気だった祖母であった。祖母が生きているときは、過去の祖母の想起がうまくいかなかったのだが、目の前から祖母がいなくなった途端に過去の祖母の想起ができるようになったのである。

これは、脳内に記憶が蓄積されていき、記憶情報を取り出すことを想起と呼ぶ立場からすると、説明に苦労する事例かもしれない。なぜならば、祖母という記憶を喚起するものが目の前に存在していないときのほうが想起は成立しているのだから。

したがって、この種の想起―目の前にソレが無いからこそかえってありありとなされる想起―を、外部環境の情報を取り込んで、それをもとに脳内検索をし、適切な情報を取り出すというような、認知モデル的に理解することは、実情から離れた理解であると言わざるをえない。そこで武器となるのが、ギブソンの生態心理学である。本書評ではまず、ギブソンの知覚論と想起論のつながりを評者なりに説明するところから始めたい。

２．ギブソンの知覚論・想起論

想起は脳内に貯蓄された記憶情報の検索ではない。まずはこのことを認めよう。コツは目の前のモノをつぶさに観察することである。つぶさに観察するというのは、自己の内面ではなくひたすら外界への知覚に専念するということである。

いま私の目の前にはテーブルの上におかれたグラスがある。中には冷たい麦茶が半分ほど入っている。これを見るとき、私は端的にそれを見ている。つまり、目の前にコップがあるなと認知して、その認知に従う形で知覚しているのではない。私たちがこういった場合に通常考えてしまうような、「物体→認知→知覚」というモデルは回りくどい。認知という脳内のブラックボックスを想定する必要はない。私たちが物体を知覚するときというのは、端的にそれを知覚しているのである。

*1 福山市立大学都市経営学部 講師
Lecturer, Faculty of Urban Management, Fukuyama City University

この知覚論にもう一捻り加えてみよう。眼の前のコップはいま冷たい麦茶が半分ほど入っていると先ほど言った。しかし、たとえば、パソコン作業に熱中していて麦茶をすでにいくらか飲んでしまったことを忘れ、よく見ずにコップに手を伸ばしたとき、そのコップの軽さに驚くような経験はないだろうか。このとき、眼の前の麦茶が半分しか入っていないコップと、麦茶が並々入っているはずのコップが重ね合わされていると考えることができるだろう。この重ね合わせの状態が重要である。なぜならば、この重ね合わせこそが想起だからである。

本書において想起は、心理学者エドワード・リードの概念を用いて「自己の二重化」(2)と表現される。二重化とは、重ね合わせのことである。そして、ここで言う自己とは、「こころ」なるものを内面に持つ自己ではなく、身体とその周りの環境のことを意味する。すなわち、自己＝身体／環境の二重化とは、半分麦茶のコップと並々麦茶のコップという環境が重ね合わされ、半分麦茶のコップを手に取る身体と並々麦茶のコップを手に取る身体が重ね合わされることである。半分麦茶のコップを手にしたとき、私たちは「あれ、並々麦茶が入っていたはずなのになあ」と私たちは知覚する。これがまさに想起である。このように、二重化、あるいは重なり合いの知覚が想起である。

これが、本書および本稿がよってたつ想起論のあらましである。「過去の自己」と「現在の自己」がズレていることを知覚することによって想起がなされるのである。

さて、このような想起論を理解してはじめて、私たちが暗黙の前提としていた「通常の想起論」の不十分さが見えてくる。次節では、本書にしたがって、「記憶痕跡説」および「社会構成主義」への批判を通じて生態学的想起論への理解を深めていこう。

３．反−認知主義、反−物語りとしての想起論

本書の前半部分では、教科書に載るような心理学者たちが複数登場する。そしてそれらの心理学者の大半が前提としている想起の理論的枠組みが「記憶痕跡説」である。たとえば著名な心理学者エビングハウスが行った無意味音節実験は、無意味音節（LAH、RORなど）を被験者に学習させ、それを一定期間保持させ、その後にどれだけ正しく再生できるかを確かめている。こういった実験が可能なのは、記憶がまるで蝋板に刻印された文字のように脳内に蓄積されていると考えられていたからである。記憶の痕跡が脳内にあるという前提が信じられているのであれば、記憶の痕跡が蓄積されているはずの脳の構造や機制を明らかにすることが求められる。そのため、実験や脳波測定が記憶に関する研究の主流となっていった。

しかし、このような記憶痕跡説には、本書において反-認知主義的的な2つの反論がなされる。第一に、実験で得られた結果は私たちの想起のあり方を正確に写し取っているのかという疑義が生じる。たとえば、先ほど例示した無意味音節の再生実験にしても、私たちの日常で無意味な単語を覚えておかねばならないような事態はほとんど生じない。これはナイサーが主張するところの「生態学的妥当性」の議論と重なる。また、実験によって得られた結果はほとんどの場合、確率的事象として判断される。しかしながら、たとえば筆者が長年関わってきた供述の判定のように、目の前の人が語る記憶が正しいかどうかを確率的に考えても仕方ないはずである。まさか、「あなたは6割の確率で嘘をついているから有罪である」とは言えないだろう。

記憶痕跡説に対する2つ目の反論は、痕跡説が心理学的本質主義に陥っており論理的に矛盾しているとするものである。この反論は本書において引用されているガーゲン（Gergen, 1994）の指摘が鋭い（本書p.35）。心理学的本質主義とは、外界と内界が存在し、内界は外界の写しであるとする考え方である。このような考え方では、忘却についての説明が困難となる。つまり、あることを忘れたと気づくためには、それがかつて記憶にあったことだとわからないといけないはずなのに、それを覚えているということは忘却の否定になる。つまり、不思議なことに忘却は矛盾した概念となってしまう。したがって、人間の心を外界／内界のように二元論的に理解すると論理的な矛盾が生じ、外界／内界図式を前提におく記憶痕跡説も誤っていると考えられる。本書で展開される生態学的想起論が反-認知主義であることがここに示唆される。

記憶痕跡説の次に本書において批判されるのは、想起を物語りとして素朴に捉えようとする立場である。議論となるのは、正しい記憶とはなにかという問いである。ディーン証言研究という一連の研究がある。当時の大統領法律顧問であったジョン・ディーンはウォーターゲート事件へのニクソン大統領の関与についてまるでテープレコーダーのように詳細に語った。当時の人びとはディーンが嘘偽りなく正確に証言していると感じた。しかしながら、驚くべきこと

に、彼の証言はおおよそデタラメだったのである。

供述心理学にも明るい著者が言うには、容疑者の供述の信用性の基準として「詳細さ」「具体性」「迫真性」「臨場感」「一貫性」がしばしば問われる。しかしながら、たとえば詳細すぎる証言はかえって不自然ではないだろうか。やけに具体的で、迫真性や臨場感もある証言は、それをもって正しいと言えるだろうか。一貫性のある証言は、むしろ思い出語りというよりも頭で作ったストーリーのように聞こえないだろうか。このように考えれば、物語りとして自然な語りは、かえって不正確な語りである可能性がある。実際に詳細で具体的な「自白」が証拠として採用されている事件のいくつかは冤罪であったことが明らかになっている。

実際に体験した出来事を語るとき、私たちはそれほど筋道立った語り方ができるわけではない。物語りのフレームワークが見え透いている語りはかえって怪しい。本書で展開される生態学的想起論は、反-物語りとしての想起論という一面も持っている。次節では、このような特徴を持つ私たちの想起を描写する画期的な実験「ナビゲーション実験」を紹介しながら、物語り壊しとしての想起という側面への理解を深めていこう。

４．ナビゲーション実験

直接体験したことと伝聞したことの想起はどのように異なるか。前節での問いをまとめればこのようになるだろう。この「直接経験」と「伝聞経験」の差異を明らかにしたナビゲーション実験の結果を本書をもとに簡便化しながら紹介する。

ナビゲーション実験は最低3人の参加者が必要となる。それぞれ便宜的にA,B,Cと名付けておこう。Aは初めて足を踏み入れたA大学の構内にある7つのターゲット（図書館入り口や生協売店など）を探すというミッションが研究者から課せられる。Bはこちらもはじめて行くB大学の構内にある同様の7つのターゲットを探索するように求められる。両者ともに実験の目的は「未知の環境で目標を探すときの行動を観察すること」と伝えられる。

その一ヶ月後、AとBは集められ、それぞれの大学探索の様子を共有することが求められる。その際に、二人には自分が行っていない大学、すなわちAにとってはB大学、BにとってはA大学の様子をまさに自分が歩き回ったかのように話せるように入念に情報共有をしてほしい旨が伝えられる。

そのさらに2週間後、CがAとBにそれぞれA大学の様子とB大学の様子を聞き取る。つまり、Aさんを視点にとってみれば、A大学については一ヶ月半前に自らが直接探索したことをもとに語られ、B大学については2週間前にBさんから聞いた話をもとに伝聞的に語られる。このセッションは「取調べ」と名付けられ、約2週間間隔で3回行われた。このようにして「直接体験」と「伝聞体験」の想起の語りの差異が比較可能となる。

上記ナビゲーション実験の結果、「直接体験」と「伝聞体験」の想起の差異について、いくつかのことが判明した（表1）。まず、直接体験の語りでは探索の動きにそって語りの内容が対象（図書館等）から行為（見回す等）へなどと入れ替わる傾向があるのに対し、伝聞体験の語りでは行為の語りのあとに行為について語る（ここに行って、そのあとここに行ってなど）など同一種の語りが連続する傾向にあった。第二に、直接体験の語りでは教室などの呼称がその時その時で変容する（「何とか室」「教室」「情報系の教室」）のに対し、伝聞体験の語りでは「図書館」のように統一した呼称で呼ばれた。第三に、直接体験の場合は自らの身体と比較させながら形状や色などが多面的に語られ、伝聞体験の場合はモノを形容する際にステレオタイプ的な平面的な語りが多かった。第四に、直接体験の想起の語りは、動機を尋ねられた際に「そこにあったから」といった環境駆動型の動機を答えるのに対し、伝聞体験の想起の語りは、「〇〇と思ったから」といった内面駆動型の応答が得られた。第五に、Cからの質問に対して、直接体験の想起の語りはうまく答えられないのに対し、伝聞体験の想起の語りの場合は、その質問をうまく取り込み応答していた。これらの結果をまとめると、直接体験に基づく想起の語りは、自らの身体性を重視し、言語化困難な複雑で多面的な環境をなんとか言葉にしようとしているように考えられる。それに対して、伝聞体験の想起の語りは、他者から与えられた言語情報が基盤になっているため、物語化がなされているのではないかと考えられる。

表 1 ナビゲーション実験の結果（本書 p.137 を若干修正）

生態心理学的徴候	直接体験	伝聞体験
知覚行為循環	交代優位語り	連続優位語り
対象の呼称	呼称不安定	呼称安定
環境の多面性・全体性	多面的な語り	平面的な語り
環境に囲まれた身体	環境駆動型動機	内面駆動型動機
物語壊し	要請からのずれ	要請への適合

このナビゲーション実験から分かることは、想起もまた知覚の一種であるということである。直接体験の想起の語りに見られる交代優位語りや呼称の不安定、多面的な語り、環境駆動型動機は、まさにいま目の前で探索を行った大学の様子が見えているかのように語っていることを示している。想起者の身体を過去に探索した大学という環境に置いて、そこから見えたものを言葉にしている。

さて、想起が知覚の一種であるとするならば、想起と知覚はどのように区別されるのだろうか。本書にはまさにその答えが明確に示されている。引用しよう。「環境との安定した接触が持続して可能であるとき、想起は登場しなかった。ただその環境の知覚だけが生じていた」（p.195）。ここで冒頭の私の祖母の例を思い出してほしい。私は、祖母が存命だったとき、車いすに乗り痩せた祖母の姿を見ても、元気だった頃の祖母の姿を思い出すことができなかったのだった。ここまで論を進めてきて、ようやくこの謎へのひとつの解にたどりついた。祖母が存命のときは、祖母との安定した接触が持続していたため、「現在の祖母」を知覚することしかできず、「過去の祖母」を知覚することができなかったのである。

想起とは、「現在の自己」と「過去の自己」がズレているときに生じる。そして、ここでいう自己とは、身体であり、その周囲の環境である。手にした麦茶の量が減っているときに、満杯だった麦茶が想起される。ナビゲーション実験で明らかになったように、直接体験の想起の語りは、まさに今ここでそれを見ているかのように語られる。これらは、「かつてあったのに今はないもの」と「かつてはなかったけど今はあるもの」の重ね合わせとそこからのズレの知覚によって生じている。本書において、想起とは「自己の二重化」であると主張するのはそのためであった。

さて、想起とは、自己が二重化していることの知覚であった。自己が二重化していることに気づくというのは、「過去の自己」と「現在の自己」がズレていることに気づくことである。では、どのようにしてそのようなズレに気づくことができるのだろうか。本書の議論枠組みである生態心理学に寄せて言えば、想起をアフォードする環境はいかに作られるだろうか。

５．想起のアフォーダンス

宮前（2019）は、「〈不在〉の写真を見る／撮る」と称した論文で、津波で流出した志津川駅の駅舎跡の写真をもとにしたインタビューで語られたある発言に注目している。それは、その写真を撮った地元の写真家による「ここで育った人間であれば、やっぱり、そういう『幻想』というか、そういうのは見えてくるはずだよ」（p.30）という発言である。ここで注目したいのは、思い出すではなく、「見えてくる」と話していることである。

つまり、志津川駅の跡地の写真を見て、彼は在りし日の志津川駅を知覚している。そこに志津川駅は写っていないのに、である。

この語りは、本書で述べられている想起―ズレによる「自己の二重化」への気づき―の好例である。いまはなき志津川駅を、志津川駅があるはずの場所にそれがないという〈不在〉の写真から知覚しているのである。たとえば、ここで過去の志津川駅の写真を見てもらったところでそのような想起が生じるだろうか。もちろん様々な思い出話は語られるだろうし、そのことに重要な意味があるとも思う。しかし、志津川駅の写った過去の写真をもとに語られる物語りは、いままさに目の前に志津川駅があるかのように語られるだろうか。本書で論じられるような想起をアフォードするのは、そこにあるはずのものがそこにないという〈不在〉に気づかされるような、空白の場所を指し示す環境なのではないだろうか。このような空白の知覚は、評者が長年携わってきた被災写真返却活動で目にする、画像が溶け落ちてしまった写真を見ることで、その白くなってしまった部分に「何が写っていたはずなのか」をありありと想起される被災者の姿にも見出すことができるかもしれない。

震災あるいは戦争の語り部もまた想起のアフォーダンスとして捉え直すことができる。語り部の高齢化にともなって、語りの継承が問題となっている。たとえば、戦争を経験した人は80代以上であり、そのままにしていてはかれらの貴重な経験が語られなくなってしまう。かと言って、戦争を経験していない世代がかれらの語りを丸暗記して語り継ぐことは、かえって嘘くさく感じられるだろう。経験していない身体が経験していない経験を語ることは、ナビゲーション実験の結果を見るまでもなく困難を伴うことは想像に難くない。

しかしながら、そういった第2世代の語り部には、物語の継承とは違う側面で重要な意味を持っている。それは、それを語る人と出会ったという経験の継承という側面である。戦争や災害を経験していないいわゆる非当事者が伝承できることは、それを語る当

事者がたしかにいたのだということである。当事者から聞いた戦争や災害の話は、非当事者からしたら伝聞経験にほかならない。しかし、そういった話を聞いたという経験は直接経験である。物語りの内容をそのままコピーするのではなく、そういう語りが語られる身体があり、環境があったということを伝承することが、そのさらに次の世代に語りをつないでいくということになるのではないだろうか。いわば、そういった当事者の生の語りにさらされた非当事者の身体もまた、想起をアフォードする環境を構成するのである。

想起をアフォードする環境は、あるはずのものがそこにないような環境であったり、いるはずの人がそこにいないような環境であるのかもしれない。そういった環境においては、存在と不在が二重化し、そのズレが顕在化している。見えているものをそのまま見ているとき、私たちはそれを知覚しているという。見えているはずのものが見えていないにもかかわらずそれでもなおそれが見えるとき、私たちはそれを想起しているという。このように一見空白にしか見えない環境にこそ想起のアフォーダンスが横たわっているのである。

補注

(1) 本書評を書くにあたって、12月3日に評者が主催した本書の読書会における議論も参考にした。当読書会では本書著者の森直久氏も参加された。本書評の書きぶりのいくつかは、当日の議論の内容がもとになっている。

(2) より正確には、自己とは内面に記憶を有する存在ではないことを強調するために本書内では「環境／身体の二重化」と表されているのだが、本稿では単に「自己の二重化」と表記する。

参考文献

Gergen, K. J. (1994). Mind, text, and society: Self-memory in social context. In U. Neisser & R. Fivush (Eds.), *The re-membering self Construction and accuracy in the self-narrative*. (pp. 78–104). Cambridge: Cambridge University Press.

宮前良平（2019）. 〈不在〉の写真を見る／撮る 災害と共生, 3(1), 25-38.